

---

# 赤い果実にご用心

高園銀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い果実にご用心

### 【Nコード】

N8655E

### 【作者名】

高園銀

### 【あらすじ】

これは何でもない話だ。誰かが死ぬわけでもない。ただ、一つの果実が少年の運命をほんの少しだけ変えてしまったという、その程度の物語。

(前書き)

あらかじめ言っておきます。

世にも奇妙な物語があるならば、これは間違いなく世にも微妙な物語となることでしょう。

取りあえず、後書きまでご覧ください。

(こんなくだらない小説を読もうと思ってくださった皆さんの労力に敬意と感謝を払つつ)

これは夏の暑い日の話だ。

お腹が空いた。

ふとそう思った。

午後も夕暮れ近く、すでに日が傾き始めていた。外ではひぐらしが鳴いている。

台所へ足を進めると、そこには握り拳大のすももが長方形の籠の中に綺麗に並べられていた。

その実は見事な深紅に染まっていて、実においしそうだった。

甘酸っぱいような豊潤とした香りが静かに漂っている。

「いただきつと」

軽く水で洗って食べることにした。

手に取ると柔らかな感触が伝わってくる。がぶりと齧り付くと予想通り瑞々《みずみず》しい果汁が口の中に広がり……ん？

奇妙な違和感。

ああ、今にして思えばこの時からおかしかったのだ。だが、そのときの俺は何も気付いていなかった。

その正体を確かめるべく舌先で探る。

ぷっぷっぷっ。

すももに似つかわしくない、不調和音を奏でるような音が口の中から聞こえた途端、苦いものが感じられた。

漢方薬によく似た味だった。

そして 知った。 いや、すでに俺は気付いていたのかもし

れない。ただそれがあまりにも理解しがたい出来事であるが故に、それを認めることが出来なかったのだ。

だから、退路が立たれてその時初めて俺は認識した。  
齧りかけのすももの中でわらわらと蠢く黒い“それ”を。  
その数、一匹や二匹では済まない。何十匹もの鈍く光るそれが狭  
い空間を奔めき合っている。

それを見た瞬間、あらゆる感覚という感覚が消失した。外で五月  
蠅く鳴いていたひぐらしの声も、仄かに漂っていたすももの香りも、  
気怠いような夏の炎暑もすべてが凍り付いた。

普段の彼らをよく見かけているだけに、すももの中にそれがいる  
という状況が信じられない、否、信じたくなかった。

「うわあああああああ！！」

悲鳴。

開かれた口から溢れてきたものは声だけではなかった。

俺はついさつき、その果実を食べたのだ。ならば　それが口の  
中にいないと誰がいえるのだ？

そして当然のように苦痛に歪む口からそれは湧いて出た。

顔中に四散する嫌悪。

最早そのときの俺に理性で行動するということは不可能だった。

それは至るところを　髪、鼻、耳、そして手の平を動き回る。

わらわら、わらわら、わらわらと蠢く。

全身の毛が逆立つ感覚。

腕を振っても細い足の何処にそんな力があるのか、まったく落ち  
ない。

口の中にいたそれを何匹飲み込んだのか、振り払おうとして何匹  
を潰したのか。

赤とも黒ともつかない液体が弾ける。

噛まれた痛みが体内を走りぬける。

気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、  
うあああ、ああああああああああ！！

「あああうッ！　うわあああああ！」

それは俺にとって、すぐそこにあるにある地獄だった。

その日からすももを口にするとはなかった……。

(後書き)

実話です。

どうなんでしょうね？

これはホラーなんでしょうか？

甚だ疑問ですが、取り敢えず一番近いのがホラーだったということ  
で。

強いてい言うならば、現代に潜む身近な恐怖となりますか……。  
落ちをつけるため、あえてノンフィクションとはしませんでした。

もっと違うものを期待してくださった方には申し訳ありませんでし  
た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8655e/>

---

赤い果実にご用心

2010年12月19日02時24分発行